

# 御幸町だより

No.152 2023年12月17日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る  
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

## 『他のどこにもない愛のこもった目』(ルカ2:1~16)

牧師 村島 義也

初めのクリスマスの情景は侘しく、切ない。権力者の政策に翻弄され、出産が近いのに危険な旅を強いられたマリアとヨセフ。貧しい二人を待ったのは冷たく寒い現実だった。「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである」(口語訳：客間には彼らのいる余地がなかったからである)。天使の声が響くのは郊外の荒れ野、聞くのは羊飼い。正確には彼らは羊の所有者ではなく〈羊番〉、少ない賃金で厳しい労働に付かざるを得ない身分の低い人たち…。東方の博士らの来訪が馬小屋に花を添えたか。当時、このような巡礼者に誰が敬意を示しただろう。異邦人はユダヤでは歓迎されなかったし、また彼ら以外、彼らの旅路に理解を示すものはいなかった。彼らは御子に贈り物を献げたが、それは長旅に精一杯備えた僅かなしるしの物だった。しかも、その「黄金・乳香・没薬」は結局、お生まれの御子の生涯の内に秘められた栄光、そして苦難を象徴していた。没薬と香料の香りは、やがて生まれたこのお方の死のお姿を包む(ヨハネ19:38~40)。十字架のご生涯の終わりにも、やはり我々は見捨てられているようなこの方、クリスマスの御子のお姿に出会うのだ。

けれども飼い葉桶の嬰兒、そのご生涯の意味を聖書はこう語る、「神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります」。初めのクリスマスの風景の虚飾のない貧しさの中に、そこに愛がある。飼い葉桶の貧しさと十字架の宿命、この嬰兒こそ神の救いと愛のしるし、比類なき奇跡であった。クリスマスの最初の風景は、初めから終わりまでの独り子の生涯の意味を含んでいる。神の大いなる愛の犠牲であった。この方こそ、我々に神の愛と天国を与えて下さる真の救い主であったのだ。

天使は言った、「恐れるな。わたしは、民全体に与

えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」。貧しい場所、飼い葉桶こそ他ならぬ救い主の「あなたがたへのしるしである」と告げられている。もしこの世的な力、高貴さが御子のしるしであったならば、クリスマスの物語に羊飼いたちの登場する余地はなかっただろう。異邦の博士らの居場所はなかったろう。それどころか、クリスマスの主役である寒村ナザレの若い夫妻さえ、果たしてこの世的な高貴さの中で彼らにメシアの物語に宿る余地があったかどうか。マリアとヨセフ、宿屋には彼らの「場所」はなかったが馬小屋にはあった。そこには羊飼いも異邦の博士も、皆の場所があったのだ。飼い葉桶である故、お生まれの御子は世界の全ての人々の救いであり、比類なき王であり、また我々の友であられる。

〈神は人間の卑しさを恥とは思わず、人間のただ中に入り、道具として一人の人間(マリア)を選び、最も奇跡が起こりそうもないところで奇跡をなした～そしてその結果、生まれたのが飼い葉桶のキリストである。人々が「失われた」と言うところで、神は「見いだした」と言い、人々が「裁かれた」と言うところで、神は「救われた」と言い、人々が「否」と言うところで、神は「然り」と言う。人々がなげやりな気持ちや、高慢から、目をそらせるようなところで、神は他のどこにもない愛のこもった目を向けるのである〉。

(D.ボンヘッファー1906-1945、独/牧師・神学者)

クリスマスの風景は「他のどこにもない愛のこもった」神の眼差し。神は目を向け給うたのだ、ナザレの貧しい者に、羊飼いたちに、異邦の博士らに。そして最初のクリスマスの風景において、神は人生の貧しさと悲しみと弱さを抱える我々にも、まったくそのような場所においてこそ、「他のどこにもない愛のこもった目」を向けてい給う。